



J.A.D.E.

# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成14年10月10日  
通巻28号

## 中川金治翁をしのぶ会 9月14日に開催される 地元古老と語り中川神社維持基金設立

東京都水道の奥多摩水源林の造成に生涯を捧げた中川金治の名前は、決して有名ではありませんが、その功績は、多くの書籍に掲載されている本多静六(林学博士、東京帝国大学教授)、尾崎行雄(当時の東京市長)両氏に勝るとも劣らないものと思われま

しかし、その「中川金治翁の業績が地元でも忘れ去られようとしている」という稲場紀久雄大阪経済大学教授の呼びかけで、地元丹波山村等の方々が中心になって「中川金治翁をしのぶ会」が開かれることになりました。

ここで、中川金治翁について、少し説明しますと、明治7年に岐阜県北部の宮川村(旧坂下村)の素封家の二男として生まれました。中川家は徳川時代には苗字帯刀を許されたほどの名家でした。青年時代に家業を継ぎ郷土のために尽くしていましたが、明治34年27歳の時上京、駒場の農科大学の篤志林業夫を勤めていました。明治35(1902)年、当時農科大学の教授だった本多静六博士の勧めで、奥多摩の泉水谷に入って、水源林の監視経営に当りました。ところが当時の奥多摩は禿山と崩壊地で、雨が降れば大水となり、干天が続けば多摩川の水が涸れてしまうといった荒廃しきった山地でした。中川翁は、現場の責任者として、造林作業に携わる傍ら、地元産業の育成にも努め、子供たちも可愛がり、地元住民から「山の御爺(おんじ)」と慕われたそうです。34年間に亘って奥多摩水源林を守り続け、現在の見事な水源林を育てあげたのです。

昭和10年、中川翁は退職に当って、東京都から功労賞を贈られましたが、彼の誠実で責任感が強く暖かな人格は奥多摩丹波山近辺に住む人々から均しく敬愛、崇拜され、山梨県丹波山・竿裏峠の中川神社(祠=ほこら)に、「生き神様」として祀られることになりました。翁は退職後も、引き続き水源林事務所の嘱託として働かれていましたが、昭和20年、戦時疎開のため郷里である岐阜県桑野に帰って静養中、自宅で逝去されました。享年76歳。

その中川翁の業績を顕彰する一つの契機として、丹波山村の有志の方々と共に日本下水文化研究会は、9月14日「中川金治翁をしのぶ会」を開催しました。この会合に参加した下水文化研究会のメンバーは、稲場紀久雄、谷口尚弘、斎藤博康、藤森正法、中村隆一の五名でした。

### ◇中川神社参拝

午後2時に丹波山の民宿「たちばな」に集合し、自動車で登山口まで行き、いよいよ登りはじめました。

一行は私たち五人と地元の木下さん、岡部さん、そして祝詞を上げて頂く神主の守岡さんです。丹波の集落の高度が海拔1000メートル弱。ここから20~30度の急傾斜の山道をスイッチバックのように折り返しながら登って行きます。

山は雨こそ降りませんでしたが、うっすらと霧が立ち込め、全身から流れ出る汗と霧の水滴で着ている衣服はずぶ濡れの状態です。それでも汗だけで湯気を立てながら中腹の山王沢(さんのうだわ)に辿り着きました。海拔1200mのここまで、垂直で200mですが、数十回の折り返し、距離はどれ位になるのでしょうか。山王沢では、守岡神主さんによって神事が執り行われました。神主さんが御霊を呼び寄せ、竿裏峠の中川神社の方向に向かって全員が順番に玉串を捧げ、守岡神主さんが中川翁の奥多摩入山100年を記念して祝詞をあげて頂き、皆でお神酒を少々。ここで役目を終えられた神主さんは、先程の強行軍で痛めた脚を庇いながら下山して行かれました。



神主さんが祝詞

私たちはさらに200m上の竿裏峠を目指し、一層険しい道を登り続けました。先頭を歩く斎藤さんの目の前



竿裏峠の中川神社(祠)

を鹿が跳ねて横切ったり、リスが顔を出したり…。全身汗みずくになって海拔1414mの竿裏峠に着。一同中川神社の祠の前に立ち、かしわ手を打って参拝。次いで藤森さんが般若心経を読み上げま

※3面へ続く

## 2002年度バルトン忌報告

今年のバルトン忌は8月3日(土)に行われました。12時から13時まで、青山墓地のバルトン墓前で、墓前行事を行いました。酒井代表の挨拶に続き、佐々木ゆかりさんによるバグパイプで“Amazing Grace”、“スコットランド・ザ・ブレイブ”が演奏されました。会場で配られた“Amazing Grace”の歌詞(稲場夫人ご提供)を下記にご紹介します。

## AMAZING GRACE

Amazing grace, how sweet the sound  
that saved a wretch like me.

I once was lost but now I'm found,  
was blind but now I see

'T was grace that taught my heart to fear,  
and grace my fears relieved.

How precious did that grace appear,  
the hour I first believed.

スコットランド・ムードが盛り上がった後、出席者一同による献花が行われた後、バルトン家の一族、イネス家から参加された Mrs. Beth Landin さんから「この行事が、バルトンの功績をたたえるという趣旨にとどまらず、日本とスコットランドの親善に寄与していることを一族の一人として喜んでいきます。また、米国でもイネス家のソサイエティがあり、自分はその代表として、本日出席していると思っています。このように、親善の輪が、日本、スコットランドから米国へまで拡がりつつあることを喜んでいきます。」という趣旨の御挨拶がありました。最後に、参加者全員で記念写真を撮り、神田学会館に移動しました。

学会館では、13時半から、滋賀県立大学細馬宏通氏による講演「浅草十二階とバルトンのいた明治」、が行われました。

細馬氏の講演は、現行千円札の夏目漱石の肖像写真を撮影した写真家小川和正とバルトンとのつながり、バルトンが設計した浅草十二階をめぐるエピソードを多彩な写真、風俗画を用いながら展開したものでした。

その後、石井貴志氏から石井氏がインターネット書店を通じて購入された貴重な写真集のなかからバルトン撮影の写真が紹介されました。バルトン氏が、専門の土木・建築関連の仕事だけでなく、その他の広範な分野にわたる日本の文化・風俗等に関心をよせていたことがうかがえる写真群でした。

その後、立食による会員懇親パーティに移りました。パーティでは、稲場夫人から、バルトンの子孫である鳥海幸子さん(京都在住)のお手紙の紹介、鳥海家に残る浅草十二階の青写真のコピー等の紹介があったほか、墓前に引き続き、佐々木ゆかりさんによる“グリーン・ヒル”他3曲のバグパイプ演奏があり、明治日本の雰囲気とスコットランド・ムードあふれる中での懇親パーティとなりました。

例年どおり、暑さ厳しい折でしたが、多彩な参加者が集った一日でした。行事の企画・進行にご協力いただいた多くの方々、どうもありがとうございました。

(椿本祐弘記)



## 日本とスコットランドの技術交流

今年のバルトン忌に日本とスコットランドの教育を通じた交流をご研究されておられる名古屋大学教育学部の加藤詔士先生が参加されました。その後、このテーマに関係する報告書、報文も送っていただきました。そのなかには、オリーブ・チェックランドという人が著したバルトンについての論文「桁外れの技師 W.K.バートン」を加藤先生が翻訳されたものもあります。チェックランド夫人は、グラスゴー大学におられ、『明治日本とイギリス、出会い・技術移転・ネットワークの形成』法政大学出版局、1996とい

う著書があります。下水道文化研究会もこれから発展途上国との技術交流のあり方を研究していく上で、明治時代の日・ス間の技術交流の経験も参考になるのではないかと思います。

バルトン忌に参加された、日本・スコットランド協会の岸孝様がビデオを撮影され、編集のうえ会の方へ送っていただきました。会員の方で、当日の様子は是非映像で見たいとご希望の方にはビデオテープをお貸ししますので、事務局までFAX等で申し出てください。

## 秋の多摩川源流の祭典「水と森と食の祭典」 最終プログラム

### 本会は中川金治撮影の写真を展示

前回お知らせした多摩川源流のイベント「水と森と食の祭典」のプログラムは以下のように決定しました。なお、主催は小菅村、多摩川源流研究所、(財)水と緑と大地の公社、小菅村観光協会、小菅村商工会、水と森と食の祭典実行委員会となり、小菅村を中心として開催されることになりました。本会は、水と森と食の祭典実行委員会の加盟団体として名を連ねています。本会は、「中川金治翁をしのぶ会」で用意した東京都水道記念館所蔵の中川金治撮影の写真を展示します。

また、かねてから本会は源流4市町村(塩山市、小菅村、丹波山村、奥多摩町)が協力してこの祭典を催すことを強く要望していましたが、7月30日この4市町村が多摩川源流協議会を発足させました。源流域の4市町村の協力関係が形成され、来年から多摩川源流協議会が源流の祭典を企画することも考えられているようです。

紅葉も色づいた秋の一日、多くの方の参加をお待ちしています。参加定員150名(先着順)、参加料金:10,000円(1泊2日、宿泊、パーティ、温泉含む)。申し込み、問合せ先は、小菅村役場(TEL 0428-87-0111)。

10月19日(土) 小菅村中央公民館ほか

#### ● 水と森と食の祭典

講演『巨樹からのメッセージ』

平岡忠夫氏(巨樹の会主催)

報告『水源林を造った人々』

稲場紀久雄氏(大阪経済大学教授)

シンポジウム『水と森と川を語ろう』

コーディネーター・石田幸彦氏(八王子ランドマーク研究会)、コメンテーター・菅沼栄一郎氏(朝日新聞記者・元ニュースステーション解説者)、村崎修二氏(猿まわしの第一人者・伝承者)

平岡忠雄巨樹展

交流立食パーティ

主催 小菅村・多摩川源流研究所・(財)水と緑と大地の公社・小菅村観光協会・小菅村商工会・水と森と食の祭典実行委員会(加盟団体:日本下水文化研究会ほか約20団体)

協力 東京都水道局・国土交通省京浜工事事務所・多摩川源流協議会・世界水フォーラム・全国簡易水道協議会

10月20日(日) 小菅の湯周辺

#### ● 小菅村・第5回大地の恵祭

源流の魅力を体験しよう!

多摩川流域子供交流会(世界子ども水フォーラム)

源流の森の再生(間伐作業体験)

多摩川源流郷土芸能(大菩薩御光太鼓など)

郷土食の体験(こんにやく・ワサビ漬け)

多摩川源流の産業・特産品体験

(竹、つる細工)

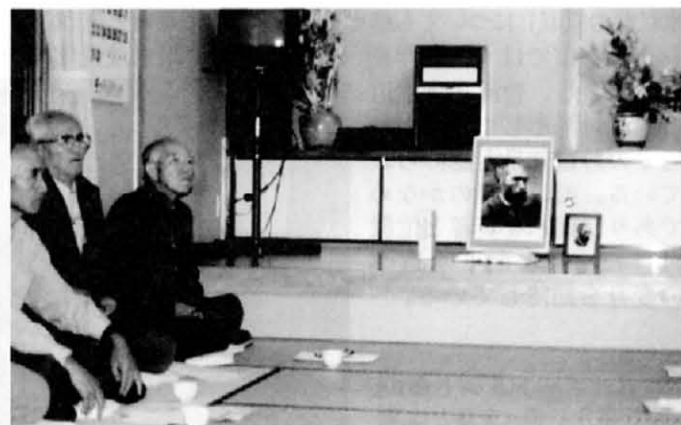
道志・小菅源流特産品交流会



した。時刻は既に午後5時を回り、7時からの「中川金治翁をしのぶ会」に間に合わせるため、一行は老体に鞭打って、暮れなずむ夕陽の下、足元も定かでない山道を猛スピードで駆けつまるびつ下山。

#### ◇中川金治翁をしのぶ会(直会=なおり)

午後7時から民宿「たちばな」で、中川神社参拝を終えての直会として「翁をしのぶ会」が催されました。会には地元の有志(そのほとんどが、70歳以上で生前の中



中川翁の写真を前に古老たちの思い出話

川翁を見知るか、親から語り伝えられた人たち)約20人が出席されました。まず「しのぶ会」の発起人の代表として伊藤巖氏(前丹波山村助役、民宿たちばなのご主人)が挨拶された後、稲場本会運営委員から「しのぶ会」開催までの経過報告が行われた。次いで、元東京都水道局長船木喜久郎氏——船木氏は地元出身で、水道局長時代から中川翁を尊敬し、翁の業績の顕彰に腐心されていたが、現在病床にある——の奥様からのメッセージを、かつて船木氏の部下であった斎藤博康本会会員が代読しました。さらに中川翁の上司であった本多静六博士の故郷、埼玉県菖蒲町教育委員会からのエールが谷口本会運営委員から報告されました。今回の「しのぶ会」の目的である『中川神社維持基金』の趣旨説明が藤森正法本会監事から行われ発起人代表の伊藤氏に贈呈されて、第1部を終了しました。

#### ◇中川翁の思い出を語る

第2部は会食しながら、稲場教授が中川翁をモデルにした自作(作・画とも)の童話本「山になったおじいさん」を朗読しながら紹介。最後に、中川会員の司会で地元の古老、猟友会の人達が中川翁の思い出やエピソードを次々に披露、酒宴は夜が更けるまで続けました。

(中村隆一記)

## 第26回定例研究会のお知らせ

本年度初めてとなります第26回定例研究会を下記のとおり開催いたします。講演終了後会場でささやかな懇親会もあります。ふるってご参加ください。

記

講演者：谷口 孚幸氏

演題：都市水代謝デザイン

日時：10月25日（金）6時半

場所：水道会館会議室

〒102-0074 千代田区九段南4-8-9

JR・地下鉄市ヶ谷駅より徒歩3分

### 【講演概要】

従来、拡大開放を前提条件として整備されてきた我が国の上下水道も水資源の量的不足や質的劣化によってその普遍性が疑問視されるようになりました。上下水道が最早画

一的なものではあり得ないことが判っても、新しいシステムのあり方を見極めるのは容易ではありません。

新しい用排水システムの構築には技術革新に基づく新技術と都市計画にリンクした都市水環境システム計画手法の確立が望まれています。これについての研究は始まったばかりですが、講演者は各都市の有する歴史、自然環境、都市環境など多くの要素を勘案しながら作られた水循環マスタープランを提示しています。持続可能で安定的な水循環を実現する用排水システムの探索について講演者とともに考えたいと思います。

### 【講師紹介】

1968年北海道大学工学部衛生工学科卒業、1982年工学博士（北海道大学）、現在大成建設（株）都市開発本部部長、著書に「地域暖房とエネルギーの有効利用」共著、「地球環境都市デザイン」、「都市水代謝デザイン」等

## 二十一世紀は保水型下水道へ

雨水利用をすすめる全国市民の会 人見達雄

私は今、やるせない気持ちでこの文章を書き始めている。

とても書くことの出来ない心境だ。東京で、母親が小学生のわが子二人を絞殺する事件が起こった。それは、私の友人の妻だった。東京に転勤して戻ったという知らせに自宅へ電話をすると、妻は、「激務で帰ってこないのです」と言った。そのうち、落ち着いたらゆっくり飲んで、展望を語り合おうと思っていた矢先の出来事となった。

私は、東京は心まで乾き始めたと思った。

### 上村講演に感激

7月6日、我々の招きで、上村裕二氏に「循環型社会における下水道行政のありかた・・・雨水を資源として利用するために」と題した講演をしていただいた。

国土交通省下水道企画課長にある人の言葉とは信じられなかった。

もともと、われわれの下水道料金問題の学習会シリーズは、多少姑息な意図を含んでいたと白状せざるをえない。それは、これ以上の雨水利用を促進するためには、雨水利用にたいする下水道料金徴収の減免が避けられないという認識からであった。国の政策を執行する立場との対立ではなく、理解を深めることを目的としていたわれわれは、対立的な表現とならないように、配慮していた。ところが、それは無用の心配で、水循環についてはわれわれ以上の理解者だった。

上村氏の講演は、雨水の利用はもとより、都市の水循環の中に位置付けた下水道のありかたを考察するものだった。これまでの下水道の現状を、「雨の日、東京湾大腸菌汚染」と題する週刊誌の暴露的な記事まで持参して、ありのままを肯定する勇氣、私は、これが役人としての真の情報公開だと、心をうたれた。しかし、循環型下水道の実現へは、ひとり、下水道担当部門だけでやれるものではないと、胸の内を聞くことができた。

### 保水型下水道への提言

これまでの下水道は、とうふの中にストローを刺し込んで水を抜き、都市を高野豆腐のように固め、土地利用を高めるための装置。一方、上水道は、都市にきれいな水を必要とされるだけ運び込む装置であったとすることができよう。下水道は静脈として、それぞれ、機能分担して発達してきた。ところがいずれも、任務に忠実なあまり度を越してしまったようだ。上水道では、集水装置としてのダムに見られるように、自然破壊と経済の負の波及効果を露呈し、下水道では、ヒートアイランド現象の結果といわれる、都市型洪水までの一因を問われることにもなってきた。その結果、ひとびとの、こころの乾燥化にも一役買ってしまっていたとはいき過ぎだろうか。いずれは、上下水道、河川、環境の合体が必要となっている。

私は、保水型下水道を提言する。保水型下水道とは、雨水の浸透と貯留を下水道施設に位置付け、土地の保水性を健全に保つことをも考慮した、改良型下水道とでもいえる。これまでの下水道とは矛盾するようだが、理解される条件はそろってきている。このなかで、「雨水公費、汚水私費の原則」についても越えることができることと思う。

小金井市ではすでに年間100万トンの雨水浸透実績を得ているし、合流式下水道の越流対策としては雨水利用での貯留効果も認められている。雨は循環のかなめであり、雨水を資源と位置付けた、保水型下水道への変身を期待している。

写真はポートランド市の屋根排水設備（文章とは関係ありません）



## 京都東本願寺の雨についていっしょに考えませんか。

「雨水利用を進める市民の会」の人見さんから、これからの雨水計画、下水道のあり方について貴重なご提案をいただきました。これまでの下水道では雨を速やかに流すことが常識でした。高度に進化した都市域で速やかに流すことは、コストの問題だけでなく様々な弊害をもたらすことも指摘されています。都市で活動するものが雨水の流出増をもたらす行為を続けていったとしたらどうなるかを考えなければいけないのではないのでしょうか。

そんなことを考えていた折、京都東本願寺が親鸞聖人の750回御遠忌に「御影堂」、「阿弥陀堂」の屋根大改修を行うにあたって、環境に配慮したことができないかという相談を受けました。東本願寺の屋根は今回修復される2棟で12,200m<sup>2</sup>もあります。雨水を貯留すれば、もちろんお寺の中の雑用水にも使えます。貯留した雨水の活用方法は防災用水、消火用水、お堀や池の修景用水など広く考えられます。

しかし、雨水を一気に流さないことで雨水に起因するインパクトを軽減する効果が期待できるのではないのでしょうか。雨水排除施設への負担を減らし、合流式で整備されている京都市ですから雨天時放流負荷も軽減できます。また、雨水貯留施設などのキャパシティも集水面積が減った分、有効に使うことができます。もちろん、一東本願寺だ

けで目立った効果は発揮される可能性は少ないでしょう。

しかし、アピール効果は大きいはずです。京都のほかのお寺や東本願寺系列の全国のお寺、そして信者の方々に波及していく可能性は非常に高いと思います。

私がかねがね、これまで建設されてきた雨水施設を有効に生かすためには、集水域に生活する多くの市民が雨水をできるだけ流さないようにすることだと考えてきました。施設の増強はますます困難な時代になってくるでしょう。市民の力でこれまでの施設を有効活用することが求められます。そのためには、人見さんが指摘されているように、雨水利用に対する下水道料金を課すことによって、インセンティブを殺いでしまうのではなく、効果をはっきりさせたいと助成などの措置を講じていくのがふさわしいと思います。それに併せてPRすることも重要です。東本願寺さんに雨水をできるだけ出さない方策を導入していただければ、何か行動しようという市民の背中を強く押すことになると思います。

このことについて、何らかの形で参加を希望される会員の方がいらっしゃったら是非御連絡ください。そのほか、会員各位からのご意見やアイデアをお待ちしております。  
(文責 酒井 彰)

## 海外水と文化研究分科会が発足しました

日本下水文化研究会では今年度事業として、分科会・海外下水文化研究会を立ち上げることでございましたが、平成14年8月30日第1回の研究会を開催し、発足することと致しました。当日は8名が参加しました。

当日は運営委員石井明男氏による講演「パキスタン・カラコルムハイウェイで行くフンザ地方」が行われました。石井さんが仕事の合間に訪れたフンザ地方は、パキスタン北部にあって、カラコルム山脈、ヒマラヤ山脈、ヒンズークシ山脈を縫うように中国に抜ける古代シルクロードのひとつ、カラコルムハイウェイをパキスタンの首都イスラマバードから700km位行ったところにある村々で、7~8000m級の山々に囲まれ、「シャングリラ」(桃源郷)と呼ぶ人もいます。石井さんが行かれたときには、一面杏の花が咲き乱れ、まさに別世界を思わせたそうです。この村々には、生活様式も、人種もちろん言語も違う民族が住んでいるとのことでした。

フンザ地方は、ジェームズ・ヒルトンの”Lost Horizon” (“失われた地平線”)として訳本もある。1937年には映画化された。)の舞台だと言われています。資料や情報は十分にはないそうですが、写真をふんだんに紹介されながらの講演で、古代シルクロードに夢をはせるひとときでした。

その後、稲場運営委員から、元JICAの専門家としてタイへ派遣されていた竹内準一氏(現在英国へ留学)との意見交換の経緯についてご紹介がありました。このなかで、途上国とくに熱帯地域の下水処理について日本はも

っと研究し、日本の技術をそのまま移転するのではなく、現地にふさわしい技術の開発の必要性を指摘されました。

第1回ということ、これからの方向性や運営についても意見交換がなされ、会名称を「海外・水と文化研究分科会」とすること、会の進め方などのルールを樫本運営委員が作成すること、その際どのようなカテゴリーを扱うかについては、石井運営委員が案を提示することを決めました。  
(以上 酒井 彰記)

会の名称が示していますように、本分科会は必ずしも下水(汚水又は雨水)の問題に限定せず、広く水問題一般にまで対象を拡げて研究対象とすることにする予定です。

第2回研究会としては、佐藤運営委員による「モルドバ共和国の水資源開発報告」を11月中旬に予定しておりますが、その後は適宜、外部講師をもお招きし、幅広いテーマと対象についての研究報告会としていきたいと考えています。また、当面は会場を当会事務所として、自由な意見交換を交えたゼミナールのような形式で進める予定ですが、将来的には、テーマによっては会場を外部に設定し、広く一般の方々の参加も想定した研究発表会も企画していきたいと考えています。

会員各位のご参加ならびにご意見、ご提案などをお待ちしております。  
(以上 樫本祐弘記)

### 輪読会参加者大募集！！

京都大学防災研究所・萩原良巳教授がパリの下水道博物館で、下水道で働く人の歴史・現実をえがいた“Paris Sewers and Sewermen”という書籍を入手されました。パリの下水道の建設とそこで働く Sewermen の仕事の現実、幾たびもの革命の時代を経ながらもアーバンサンテーションを支えてきた彼らの誇り、そして彼らの団結、こういったこれまで語られることの無かった物語がいきいきと描かれているようです。このような社会を見えないところで支えるということは、今回のふ会を行った中川金治の仕事とも通じるところがあるのではないかと思います。

著者のドナルド・リードはノース・キャロライナ大学の歴史学教授。本書は、技術史学会 (the Society for the History of Technology) で賞を得たほか公共事業史学会 (the Public Works Historical Society) の審査委員会でも好評だったとのこと。 (出版は1991年)

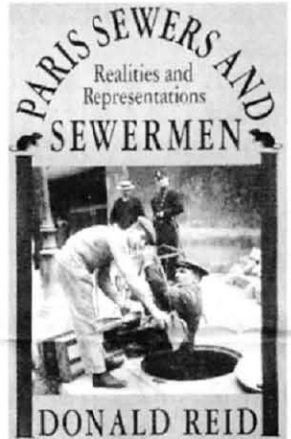
表紙の写真はねずみの箱を取り出しているところ。こ

のほか本書には、着飾った淑女を含めて下水道のなかをポートやトロッコで“ツアー”しているところなど興味深い写真も収められています。

読み応えのある本だと思います。そこで、関連事項を学びながら、本書を輪読してみませんか。一通り読み終えたところで、定例研究会などで公表の機会を設け、さらには、下水文化叢書等として出版を考えてみてはどうでしょうか。今一度、下水道が多くの私たちの働きによって十全の機能が発揮されていることが確認できるのではないかと思います。

つきましては参加者を募集します。応募あるいはお問合せは会事務所まで。多数の参加をお待ちしています。

(文責 酒井 彰)



#### 運営委員会・事務局より

##### ● 機関誌「下水文化研究14」間もなく刊行

機関誌は編集の最終段階にさしかかっており、今月中か来月初めにお届けできるのではないかと考えています。毎年、刊行時期がばらばらになってしまっていること反省しつつ、お詫び申し上げます。

なお、今回より経費節減のためメール便により送付する

予定です。転居先への転送ということが難しくなりますので、住所変更された方は速やかにお知らせ願います。

##### ● 会費納入のお願い

今年度会費はすでに200余名の会員の方から納入いただいておりますが、会の財政状況はかなり厳しい状況が続いています。未納の方は督促状発送までにぜひとも納入いただきたいと存じます。

編集後記 ▶ 第9回の国際都市排水学会 (9ICUD) に参加してきました。流出モデルがどう新規的なのか理解できなくなっている私ですが、野外ロックコンサートなど先進国のお祭りのようなイベントになっているような気もしました。都市排水で本当に困っている途上国からの報告が少なかったようです。▶ 開催地のオレゴン州ポートランドは交通計画など魅力的な町でした。雨水に関しては、屋根における保水や浸透に熱心でしたが、日本の大都市と比べて、それほど雨も多くなく、不浸透化も進んでいない状況で、浸水被害などの切実感も感じられなかったのも事実です。住民参加のセッションで、雨のコントロールは Community Issue だという点には大いに納得しました。▶ 話は変わりますが、本会の今後の展開を考えますと、会員のもっている情報発信の場の提供、講師を呼んでの講演会主体の活動から、会員相互に知恵を出し合い、何かを作り上げていくことも必要ではないかと思います。そのような動きとして、上記の輪読会、京都東本願寺での雨のコントロールへの提言なども位置づけられるかと思っておりますので、積極的なご参加を期待したいと思います。▶ 2003年に行われる水フォーラムに対しては、主体的な対応はしていませんが、国土交通省から、サンテーションというテーマに関連して、わが国のし尿処理の経験を諸外国へ伝えるために協力要請のお話を受けています。この件に関しましても具体化しましたら会員のご協力をお願いしたいと思います。

(酒井 彰)



ポートランド近くのマウント・フット

#### ふくりゅう 通巻28号 主な目次:

中川金治翁を偲ぶ会報告	1
2002年度バルトン忌報告	2
水と森と食の祭典最終プログラム	3
第26回定例研究会のお知らせ	4
二十一世紀は保水型下水道へ	4
海外水と文化研究分科会が発足	5

#### 特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5  
NJS 富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129

jade@jca.apc.org

aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>